

佳作

## おじいちゃんとおぼくと海と

福岡県 福岡市立玄界小学校四年 梅田 凌斗

ぼくがすんでいる玄界島の海はきれいです。夏になると太陽の光でほうせきをちりばめたように、きらきらとかがやいています。夜にも、月の光で海の上には光のみちみたいになっています。ときどき外国の船がきれいに光りながらうかぶのも、また玄界島から見るとかたの町も天の川のようにきれいです。ぼくのおじいちゃんは、そのはかたに生きるりょうしです。やさしいおじいちゃんです。ぼくはおじいちゃんの手伝いをします。船の中にねんりょうや水を入れます。べんとう、水とう、のみ物をつみこみます。魚をさばいたりロープをはずしたりします。ぼくにいろいろなことを教えてくれます。おじいちゃんは、夜十時くらいにいくので六じにはもうねます。ときどきは、ぼくもいっしょに行きます。

でもまたついていきたいです。そしてこんども大りょうになってほしいです。もちろん手伝いもがんばります。

「わすれもの、ないね。出発するからロープはずして。」

おばあちゃんがぼくにしれいを出します。ぼくはてきぱきうごきます。沖に出ると、

「ついたぞ。あみのじゅんびをして。」

と、おじいちゃんのしれいができます。ぼくもてつだいをしたいけど、まだこともだからあぶないとおばあちゃんがとめてしまいます。ぼくは「できるのに」と心の中で思います。

あみをあげるまでみんなでおべんとうをたべます。ラジオから朝のニュースがながれるころにあみをひきあげます。モーターでまきあげます。魚がかかっている道具ではずして氷室に入れます。魚たちは集魚ライトにきらきらととらされて、とてもきれいです。そのころになると明るくなってきて、おもしろいからねむたさはなくなります。いつものように大りょうです。

はじめてついていったときとてもゆれました。こわくてふなよいをわすれるくらいでした。ゆれたひょうしに、たいのせびれのけんがささりました。血がでてびっくりしました。とてもいたかったです。たいののろいと思いました。